

# 算 数

算数科においては、数学的な見方・考え方を働かせながら、日常の事象を数理的に捉え、算数の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決し、学習の過程を振り返り、概念を形成するなどの学習活動を充実することが大切です。

## ◆ 「内容のまとめり」の考え方

算数科における「内容のまとめり」は、学習指導要領の「第2 各学年の目標及び内容」「2 内容」に次のように示されています。

- (例) 第3学年 ※一部抜粋
- 「A数と計算」(1) 数の表し方
  - 「A数と計算」(2) 加法、減法
  - 「A数と計算」(3) 乗法
  - 「A数と計算」(4) 除法

## ◆ 具体的な内容のまとめりごとの評価規準の作成

- ① 学習指導要領に示された内容のまとめりごとの目標及び学年の目標の文末を修正し、「内容のまとめりごとの評価規準」を作成します。
- ② 「内容のまとめりごとの評価規準」のうち、抽象的で評価規準としてそのまま用いるには適さないものをより具体的に示した「具体的な内容のまとめりごとの評価規準」を作成します。

※「観点ごとのポイント」は、巻末の「学習評価等に関する参考資料のリンク集」に掲載している『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料「小学校算数(33ページ)」を参照してください。

### 【第3学年「A数と計算」(4)「除法」の具体的な内容のまとめりごとの評価規準(例)】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。</li> <li>・ 除法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができる。</li> <li>・ 除法と乗法や減法との関係について理解している。</li> <li>・ 除数と商が共に1位数である除法の計算が確実にできる。</li> <li>・ 割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。</li> <li>・ 簡単な場合について、除数が1位数で商が2位数の除法の計算の仕方を知っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図式を用いて考えている。</li> <li>・ 除法は乗法の逆算と捉え、除法の計算の仕方を考えている。</li> <li>・ 余りのある除法の余りについて、日常生活の場面に応じて考えている。</li> <li>・ 「日常生活の問題」(単なる文章題ではない。情報過多の問題、算数以外の教科の問題)を、除法を活用して解決している。(いろいろな単元が終わった後に日常生活の中から、もしくは他教科等で、除法を適切に用いて問題解決している。)</li> <li>・ 簡単な場合について、除数が1位数で商が2位数の除法の計算の仕方を考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えようとしている。</li> <li>・ 除法が用いられる場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている。〔「わり算探し」など〕</li> <li>・ 自分が考えた除法の計算の仕方について、具体物や図と式を関連付けて考えようとしている。</li> </ul>

※下線部は、「内容のまとめりごとの評価規準」からより具体的に示した箇所

## ◆ 単元の評価規準の作成

算数科においては、単元を作成する際、「内容のまとめり」を、いくつかに分割して単元とする場合やそのまま単元とする場合、いくつかの「内容のまとめり」を組み合わせる場合があるので、それぞれの場合に留意して単元の評価規準を作成します。

例示した第3学年「A数と計算」(4)「除法」は、「内容のまとめり」がいくつかの単元に分かれる場合であり、「わり算」、「余りのあるわり算」、「大きな数のわり算」の三つの単元に分けて学習することが多いため、「具体的な内容のまとめりごとの評価規準」に示されている内容から、「余りのあるわり算」の内容に合った評価規準を抜き出し、単元の評価規準を作成します。

### 【単元「余りのあるわり算」の評価規準(例)】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。</li> <li>② 除数と商が共に1位数である除法の計算が確実にできる。</li> <li>③ 割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えている。</li> <li>② 余りのある除法の余りについて、日常生活の場面に応じて考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えようとしている。</li> <li>② 除法が用いられる場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている。(「わり算探し」など)</li> </ul>

「単元の評価規準」を基に、「指導と評価の計画」を作成します(次ページの事例を参照)。「指導と評価の計画」には、一単位時間ごとのねらいに合わせて、「単元の評価規準」を割り振っていきます。その際、単元のまとめりの中で観点別学習状況を適切に評価できるよう、次の点に留意します。

- ① 単元の評価規準の文言を活用する。  
単元の評価規準を細分化すると、評価場面の精選や児童全員の評価が難しい場合があるため、単元の評価規準の文言をそのまま用いて作成します。
- ② 評価場面を精選する。  
主に「努力を要する」児童の学習状況を確認する「指導に生かす評価」と、学級全員の児童の学習状況を確認する「記録に残す評価」を区別します。
- ③ 評価方法を工夫する。  
どのような児童の姿を「おおむね満足できる」と評価するのか明確にし、児童の活動の様子や話し合い時の発言、ノートの記述内容、回収したワークシートやノートなどの分析、ペーパーテストなどから、観点到した方法を選択します。

◆ **学習評価に関する事例**

1 **単元名**

「余りのあるわり算」

2 **内容のまとめ**

第3学年「A数と計算」(4)「除法」(全10時間)

3 **単元の目標**

- (1) 割り切れない場合の除法の意味や余りについて理解し、それが用いられる場合について知り、その計算が確実にできる。
- (2) 割り切れない場合の除法の計算の意味や計算の仕方を考えたり、割り切れない場合の除法を日常生活に生かしたりすることができる。
- (3) 割り切れない場合の除法に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき生活や学習に活用しようとしている。

4 **単元の評価規準**

※前ページ【単元「余りのあるわり算」の評価規準(例)】を参照

5 **指導と評価の計画(10時間)**

※網掛けは、評価したことを記録に残す場面

時間	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
1・2	余りがある場合でも除法を用いてよいことや、答えのを見つけ方を具体物や図などを用いて考える。				行動観察 ノートの 記述内容
3	余りがある場合の除法の式の表し方や、余りなど用語の意味を知る。 余りと除数の関係を理解する。 ・余りと除数の関係を調べる。	① ③	①	①	行動観察 ノートの 記述内容
4	等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考える。 ・等分除の場面で、答えのを見つけ方を考える。		①		行動観察 ノートの 記述内容
5	余りがある場合の除法計算について、答えの確かめ方を知る。	②			行動観察 ノートの 記述内容
6・7	日常生活の場面に当てはめたときに、商と余りをどのように解釈すればよいかを考える。 ・商に1を加える場合や加えない場合について、それぞれ考える。		②	①	行動観察 ノートの 記述内容
8	学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。(章末問題)	① ② ③			ノートの 記述内容
9	学習内容の定着を確認する。(評価テスト)	① ② ③	②		ペーパー テスト
10	学習内容を適用して除法の問題を考えたり、解決し合ったりする。			②	ノートの 記述内容

**【POINT】**  
「記録に残す評価」以外の時間は、「指導に生かす評価」として、主にCの児童の学習状況を確認し、児童がBに到達するための指導を工夫します。

**【POINT】**  
「記録に残す評価」の時間は、無理なく適切に実施できるように、全ての時間に行うのではなく、単元の中に意図的・計画的に位置付けます。  
また、「記録に残す評価」は、一単位時間で全ての児童に対して3観点全てについて評価のための情報を収集することは難しいため、各時間のねらいにふさわしい1から2観点に評価項目を精選します。

**【POINT】**  
「知識・技能」は、単元の学びを通して習熟が図られ生きて働く確かなものとなることや、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」は、単元の学びを通して豊かになる数学的な見方・考え方とともに高まっていくことが考えられるため、単元の後半に記録に残す評価の機会を設定しています。